

イ・アミルは後悔していないだけでなく、現在の状況はラビン政権に責任があるという。ネタニヤフはその中で生き残ろうとしているだけだと。

「沈黙」を破るのは誰のため？

池上貴子

落ちついてイスラエルを考えることができない。

紀元七十年のローマ帝国追放と世界全土への離散、ディアスポラ（離散民）への迫害の積み重ねの果ての第二次大戦のホロコースト、一九四八年五月のイスラエル独立を成し得たものの、その直後から先住していたアラブ民族であるパレスチナ人とアラブ諸国との四度にわたる大規模な中東戦争、その後のレバノン侵攻に続くガザ侵攻。

ガザ地区の空爆を問題視した我らが「鯨の会」は、課題図書に「イスラエル」をテーマとしたが、この原稿執筆の時期には更に事態は悪化し、イスラエルはイスラム過激派武装組織ハマスの支援国であるイランに対し空爆、加えてネタニヤフ首相はガザ地区南部ラファへの地上侵攻の構えを見せている。また、核武装し最先端の兵器を所持するイ

ガザ戦闘では今年の五月中旬までにジャーナリスト一〇四人が死亡した。

スラエルに対して旧ソ連戦闘機が主力航空戦力であるイランが核武装に踏み切るかの国際的な懸念も再燃している。

今回の課題本の一冊である『イスラエル 人類史上最もやっかいな問題』の著者であるダニエル・ソカッチは、世界の大半の人々がイメージで理解している「ユダヤ人」のいわば「中の人」（当事者）の自覚をもち、ユダヤ人から見た実情や歴史を解説してくれる。先述のイスラエルの歴史や情勢は誰もがメディアで知ることのできる情報に過ぎない。これに対し、中の人の解説は恐ろしくディープで驚きの連続である。私が「離散」と語るユダヤ人たちを、彼はず「セファルディ系ユダヤ人」（アメリカ・スペイン方面に離散したユダヤ人）と「アシケナージ系ユダヤ人」（東欧やロシア方面に離散したユダヤ人）に分けて語る。その後、セファルディ系は、迫害の元にアフリカまで南下した者と南米から北米つまりアメリカ政府の中枢に入り込んでいく者で運命が分かれ、アシケナージ系は帝政ロシアの「ユダヤ人共生集住地域」での迫害から一部はアメリカに移住していき、一部は東欧やソビエトといった共産主義

を経験した後、イスラエルに押し寄せた。イスラエル国家独立後もアフリカ系ユダヤ人が差別されたりロシア系が入り込むことで対アメリカとの複雑な関係性が生まれたり、私達の知らないユダヤ人の内部事情をこれでもかと語って聞かせてくれるのだ。ユダヤ人＝シオニズムと短絡的に認識していた私（と世間一般のユダヤ人以外の人）の理解度を完全に把握したうえで、ソカッチはそのシオニズムさえも何通りもの派閥があることを示すなど、ユダヤ人コミュニティの複雑さがもたらすイスラエルの現在を最深部から浮き彫りにしていく。

国（土地）を持たずに全世界に散りながら、ユダヤ教を信仰するというたった一つのアイデンティティだけでつながり続けてきたユダヤ人としての民族の在り方や、パレスチナ人を迫害し戦争まで起こす現在のイスラエルの国家戦略は、海洋に守られた「島」に定住してきた多くの日本人にとっては、最も想像することが困難だろう（だからこそ歴史や社会の授業ではユダヤ人問題に取り組んでほしい）。ソカッチは暴力的な解決に徹底的に反対し、イスラエルからも睨まれてさえる組織のリーダーだが、一方でユダヤ人が自らの国を持つという民族的な悲願について世界の人々に理解を促してもいる。たとえば、アンネ・フランクの家を訪ねた娘との会話エピソードが印象的だ。アンネの

家で娘は、なぜアンネと家族は「どこでもいいからほかの国」に行かなかったのかと尋ねている。

私は娘に、ヨーロッパで恐ろしいことが起こっているとはっきりわかってもお、ヨーロッパのユダヤ人を進んで受け入れてくれる国は世界のどこにもなかったのだと説明した。当然、娘は信じられない様子で、どうしてユダヤ人が安全に行ける国が世界に一つもないのかときいた。まさにそのときその場で、私はシオニスト意識の誕生を目の当たりにしたのだ。

数千年の長い迫害と放浪の果てに起きたナチス党によるユダヤ人大虐殺に、個人の救い手はいたにせよ、世界の国々は沈黙した。「ヒトラーが『最終的解決』を実行する前の数年間に、ヨーロッパのユダヤ人の多くに避難所を提供する国が世界に一つでもあれば、言うまでもなくあなたが本書を読むこともなかっただろう」と、ソカッチは世界の人々に向けてユダヤ民族の孤独な心的状況を説明する。世界の沈黙が、頑なに自らの地を奪われまいと攻撃する現在のイスラエルとつながっていることを、自覚をもって理解しておきたい。

本書を読み進めることで、イスラエルを取り巻く中東の